

入れしかば、大に用立ちけるとなり、
〔相州兵亂記〕^四松山合戦之事

此憲勝^{〇上}ハ管領憲政ノ末子ニテ、小田原トハ大敵ナレバ、縦ヒ命ヲ失フトモ、降參ハアルマジ
キニ、相隨フ者ドモ、臆病神ヤ付タリケン、色々イサメ、其上竹タバニテ鐵炮ヲ防ギシ程ニ、スベキ
テダテナクシテ、終ニ後詰ヲ不待、降人ニナリ玉フ、云ヒ甲斐ナキアリサマナリ、

〔三川隨筆〕稻富伊賀は、元來細川殿^{三齋}の家來にて、奥方の執權として付置れける處に、慶長五年、
石田治部少輔三成が騷動の時、諸大名の人質を大坂城中へ取入んと評定に付、細川殿の奥方を
一番に取入んとせし時、奥方は自害し給ひ、付添居たる三人の家老の内、河北石見、小笠原勝齋は
腹かき切て死たりしに、此稻富一人は大臆病の人にて、敵もよせざる以前に、主君を捨て落失、大
臆病の悪名をとられし也、此稻富伊賀は鐵炮に名を得、天下無雙の達人にて、さげ針に虱をつら
ぬぎても、打程の名人なり、家の上に鳥の聲するを聞、家の内より其姿をも見ず、是を打に、忽にあ
たる、又手拭にて眼をつゝ、み的を打に、百度打て百度あたる、尤希代の手だれ成しかば、大神君聞
召及ばせられ、其後越中守殿へ種々御詫言遊され、召出されて御家人に仰付られにけり、其時上
意有けるは、あの者は隠なき大臆病者なれ共、その臆病は藝につり合なるべし、渠が術を天下の
人に習せんに、其臆病は弟子にうつるべからずとて、尾張大納言義直卿に御付遊されしと也、さ
れば此稻富、細川殿に隨ひ、朝鮮に渡海せしが、此人の打鐵炮一ツも敵にあたらざりし、稟性の臆
病は是非に及ばざるもの也、後年入道して一夢齋と云しは此人也、

果斷